

論文要旨

目的： 切迫早産によって予期せぬ入院に至った妊婦に対して、特に入院直後の時期に焦点を当て、入院生活の受け入れを促す看護を明らかにする。

方法： 研究対象者は、助産師としての臨床経験が 5 年目以上であり、外来・入院棟問わず、入院するに至った切迫早産妊婦への看護経験がある病棟助産師 5 名であった。半構成的面接法にて得られた内容を質的記述的に分析し、カテゴリー化を行った。データ収集は 2016 年 10 月から 11 月に行った。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った(承認番号:16-A056)。

結果： 切迫早産によって予期せぬ入院に至った妊婦に対する入院生活の受け入れを促す看護は次の 13 のカテゴリーによって構成されていた。まず、現在の状況を正しく理解できるように、【妊婦と児の置かれている状況をイメージしやすいよう具体的に説明する】こと、【妊婦と児にとっての今後の見通しを持てるようにする】こと、【入院治療のメリットを感じられるように説明する】ことを行っていた。また、入院による生活の変化に対処できるように、【制限された状況の中での対応策を提案する】ことを行っていた。妊婦との関わりにおいては、【抱えている思いの表出を促す】、【揺れ動く思いに寄り添う】、【母親としての自責の念が増強しないような声掛けをする】、【身近な存在の医療者であることを示す】など、妊婦の思いに対して、受容的・共感的な姿勢での関わりがあった。そして、【薬物・安静治療に伴う苦痛・不快感を軽減する】こと、【新しい環境における妊婦自身の生活ペースをつかめるようにする】こと、【家族からサポートを得られやすいような状況を調整する】ことによって、身体的・物理的な状況を整えていた。また、【多部署との連携により社会的側面の課題へ対応する】、【医療者間の情報共有により一貫したケアを提供する】など、チームを意識した包括的なケアを行っていた。

結論： 切迫早産によって予期せぬ入院に至った妊婦に対して助産師が行う看護の特徴として、入院治療が必要な疾患であるという理解を促し、安心感を得られるような関わりがあった。また、身体的・物理的な状況を整えることでマイナス感情の軽減を図り、家族や多職種などの妊婦を取り囲む人々と連携し、包括的なサポートを提供していた。これらのことから、助産師側への働きかけとして、切迫早産妊婦の精神的側面へのケアに関する教育の充実と、カンファレンスを活用した実践的学習の機会の提供と多職種連携の促進の必要性が示唆された。